Lecture ◉レクチャー

なぜ私は政治家になったのか

石田 芳弘 ◉中部大学客員教授・元犬山市長

二〇一二年一〇月一〇日（水）一五：三〇～一七：一五
中部大学リサーチセンター二階大会議室

「学んで時にこれを習う、また説（よろこ）ばしからずや」、これは『論語』の出だしです。二五〇〇年前に孔子が学ぶことは喜びだという人生観を語っています。今日私はここへ楽しみに来ました。私は今日、自分の政治の経験を話しますから、皆さんの人生を楽しくするヒントにしていただきたいと思います。これは高等学術フォーラムというシリーズで、私の畏友の小島先生に司会をしていただき、学長の山下先生初め学者さんがたくさん聴いていただいています。私は山下先生にも絶対勝てることがある。選挙を一〇回やっていますからね。だから、選挙を通してしかできない政治家という職業の経験談を話してみたいと思います。

レジュメをお渡ししましたが、ここに書いてあることがキーワードですから、このレジュメに従ってお話ししてみたいと思います。最初に政治家を志したきっかけを、二番目に自分史を語ります。三番目は「天命を知る」という、これは『論語』の一節で、ここが一番の中核です。それから四番目が還暦ということについて。この四つのテーマで話したいと思います。

1. 政治家を志したきっかけ

まず、政治家を志したきっかけです。

「パトリオット」というキーワードを書いておきましたけれども、これは訳すと「愛国者」ですね。湾岸戦争のときのアメリカ軍の誘導ミサイルをパトリオットといいましたが、「愛国者」という意味です。しかし皆さん、「パトリ」というのは「ふるさと」という意味なのです。今度自民党の総裁になった安倍さんが総理大臣だったときに、愛国心を育てなければいけないということで教育基本法を改正しましたが、僕は反対でした。「天国は要らない、ふるさとが欲しい」と言った詩人もいますけれども、ふるさとへの自然体で出てくる愛情や誇りがあれば、自然体として愛国心につながっていくと思う。上意下達で上から下へ統治の一つの手段として愛国心を使うことには、僕は反対です。それよりも下から自然体でわき上がるようなふるさとに対する愛情や誇りですね。愛情と誇りはワンセットです。私はこういうものが愛国心になるべ

きだと考えています。

「ビュルガーマイスター」というのはドイツ語です。私が政治家になろうとしたきっかけは市長選挙です。大学を出まして二三歳のときに、私の友人のお父さんが市長選挙に立った。そこで頼まれて選挙を手伝ったのです。僕はどちらかというとノンポリの若いころを過ごしまして、政治家にはあまりいい印象を持っていませんでした。しかし、地元の市長選挙を手伝った。皆さん、市長選挙のときの話題として沸騰するのは、やはり自分の町をどうしようかという議論です。あそこが悪い、ここが悪い、こうしなきゃいけないと、私は二三歳でしたが、大人たちが夢中になって自分の町のことを議論しているその姿を見て洗脳されたのです。おもしろいと思った。皆が熱中して寝食も忘れてのめり込んでいる市長選挙を見まして、これはおもしろいと思った。そのときにふと心の中に「おれの人生、この生まれたふるさとの市長になってみたい」という思いが芽生え、それがだんだん大きくなって職業として市長を目指すようになりました。

三番のところで市長時代のことをなるべく克明に話しますが、私はそもそも高校時代、大学へ進学するときに学校の先生になりたかったのです。若いときにいい教師に出会い、一人の教師の一言が決定打になることがあります。私は体育系の高校生だったものですから、毎日毎日トレーニングをしていました。陸上部の選手だった。陸上ばかりではなくて野球も好きでしたし、バスケットも水泳もやったりしていましたら、たまたま体育の先生が「君なぁ、おれは体育の教師を二〇年やっているが、今まで会った中で君は最高の才能を持っているぞ」と言ってくれた。それで僕は、「よし、この先生の後を継いで体育の教師になろう」と思ったのです。

人間は認められるとうれしいですからね。その人がお上手を言っているか本当のことを言っているかはわかります。だから、体育の教師になろうと思った。その先生が当時の東京教育大学を出た柔道の先生だったものですから、後を継ぐということで今の筑波大学を受験したのです。でも、一浪してもどうしても受からなくて、私の父親が二浪は経済的にだめだと言うから断念して京都の同志社大学商学部に行きました。京都で勉強したことによって、それはそれで一つのものをつかんだのですが、人生で初めて出会った大きな挫折でした。その後、私は政治の世界へ入っていきましたが、やはり心の中に教育や教師に対するあこがれみたいなものをずっと持っていました。

四九歳のときに犬山市長になり、最初に犬山市の姉妹都市であるドイツのザンクト・ゴアルスハウゼンという町へ行きました。ライン川の中腹にありますローレライの像のあるところです。ドイツでは市長のことを「ビュルガーマイスター」というのですが、これを直訳すると「市民の先生」という意味だとそこで教えられた。「おおっ！教師にはなれなかったけど、市民の先生になれた」、「よし、名実ともに市民の先生になろう」と思ったのです。それが市長職を務める最大のモチベーションになり、目標になりました。政治家であり、市民の先生になろうと。

さらに、『論語』に出会った。後から『論語』の話をしますが、孔子というのは人類の教師です。教育とか教師像というものが私の政治家としての物の考え方、一つの思想みたいなものをつくってきたと思います。

それから、政治家が皆さんに公職者としてある程度権威を持って物を言えるのは、選挙をやるからです。選挙によって自分は代表者

になっているんだという意識があるからです。選挙というものについて、ちょっと私の経験と考え方を申し上げたいと思います。

まず、民主党がこういうふうになった原因はいろいろありますけれども、一つの原因に小沢一郎さんの存在があると思います。民主党を破壊していった。あの人は創造する人ではありません。いい意味も悪い意味もひっくるめて破壊する人です。私が民主党で衆議院議員になったとき、小沢さんは新人をみんな集めて「あなたたちは明日から次の選挙の当選を目指して頑張ってください」と言った。これに僕は反発した。小沢一郎さんの政治哲学では選挙が目的になっている。そこで、チャーチルの「次の選挙のことを語るのは政治屋であり、政治家というのは次の時代を語る」という言葉を引用し反論しました。そうしたら、翌朝の産経新聞に「反小沢の急先鋒」と書いてあった。以来、小沢さんという人には子分がおりますが、そういう人たちが横を向いて通っていくような状態になってしまったのです。あくまでも政治家は選挙によって生まれますが、選挙は手段です。手段と目的を間違えると決定的な違いになります。

僕は選挙を教育と結びつけました。ここに「選挙は民主主義の学校である」と書いておきましたが、僕はこれを信じて選挙をやってきました。民主主義で一番大事なのは平等です。門地の平等、家柄の平等ということです。家柄で差別するということは、まず一番いけない。それから、基本的人権も大事です。あるいは、議会主義、普通選挙、国民投票、自治体で言うと市民投票をやらなければいけません。それから、複数政党制、一切の差別の撤廃、思想、報道、言論、集会、結社など各種政治活動の自由、こういうものが民主主義を担保しているのです。

ですから、その政党が言っていること、その政治家が選挙のときに言うことを聞き、今私が言った民主主義の思想に照らして、この人は民主主義を大事にする人かどうかということを皆さんが判断することです。私は、それが教育だ、公教育の一つの役割だと思う。民主主義はこういうものであるというリテラシーを学ぶのが公教育の一つの役割だと思っていまして、選挙は民主主義の学校であるということを政治家として選挙を通してあちこちで言って回りましたし、私自身も民主主義の学校であると思って選挙をやってきました。

もうじき衆議院の選挙があるかもしれません。私は昨日、テレビ愛知がコメンテーターをやってくれと言うものだから行ってきましたが、マスコミは「いつ解散ですか」と、そのことばかりしか聞きません。そんなことは任期いっぱいやればいい。いつ解散かということよりも国会改革のほうが大事なのです。この話をしていると時間がなくなりますから一言で言いますが、今の国政は「国対政治」といって、会議に入る前に各党の調整ばかりで時間を食って、本筋の議論をしていない。会期を決めますが、通年国会にして一年中国会をやる、いつ始まっていつ終わるかなんてことを議論しなくてもいい。マスコミもそういう本質的な議論を望まなくて、「いつ解散ですか」とか、「今度はどちらが勝つでしょうか」とか、そんなことばかり。本質的なところを改革しないと、今度民主党以外に政権交代しても同じことですよ。政党がかわるだけで同じ現象は少しも直りません。表紙を変えるだけで中身の変わらない本みたいなものです。

皆さん、今度の選挙も、各政党の言うことを私の言った民主主義の思想によく照らして判断してください。どの政党が私の言った平

等とか基本的人権をきちっと言い切っているかということですね。そういうところを判断してほしいと思っています。

2. 自分史

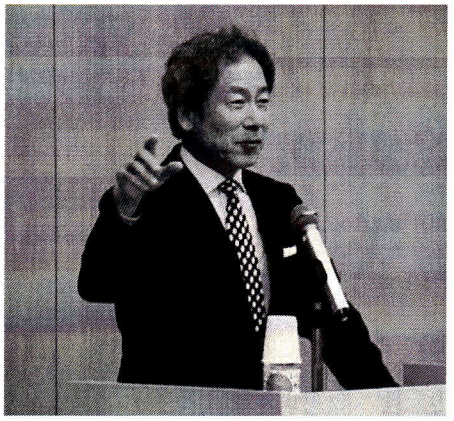
次に、自分史です。

私は一九四五（昭和二〇）年一〇月の生まれです。ですから、大戦の終わったときに生まれてずっと今日まで生きてきました。「団塊の世代」という言葉もキーワードですが、昭和二一年ぐらいから二五年ぐらいまでを団塊の世代と言いますね。戦後の日本は、この団塊の世代を中心にして変化してきております。団塊の世代が何歳になるかということでわが国の変化の中心が理解できるように思います。その中で政治という仕事をして生きてきました。

いっとき「ポストモダン」という言葉がはやりましたが、社会学者の橋本努さんという人が「ロストモダン」という言葉を使っています。これはおもしろいから僕も頭の整理に使っているのですが、大体一九四五年から一九七〇年までを「モダン（近代）」、一九七〇年代以降一九九〇年代までを「ポストモダン」、一九九〇年代以降を「ロストモダン」というのです。終戦後の一九四五年から一九七〇年のいわゆるモダンのときを、私は学生時代から国会議員の秘書としてスタートしました。一九七〇年代から一九九〇年代のポストモダンを愛知県の県会議員として過ごしました。それから一九九〇年代以降は、犬山市長と、最後は衆議院議員になりましたけれども、そのときによって時代背景とやってきた仕事が違います。

一九四五年から一九七〇年代までの社会を動かしていく駆動因は、言ってみると「勤勉さ」でした。私の最初の師匠は田中角栄の盟友の江崎真澄という自民党の重鎮でしたが、この方々の影響も受けました。田中角栄さん、私の先生の江崎真澄さんは、とにかく勤勉に働け、現在を我慢して将来があるぞという人生観です。戦後から一九七〇年ごろまでは貧しかったから、ずっとこれが日本全体にあったのです。

ところが、県会議員になった一九七〇年代以降はバブルでした。ちょうど県会議員のときに田中康夫さんという人が『なんとなく、クリスタル』というベストセラーを書きましたが、バブリーで、消費こそ美徳である、物



いしだ・よしひろ◎1945年、犬山市生まれ。同志社大学商学部卒業。1983年に愛知県議会議員に当選し3期12年務める。1995年、犬山市長に当選。市長在任中は、犬山城、城下町の再生、さらに「犬山教育」であまねく知られた教育改革に取り組み地方自治に新しいモデルを創造する。特に全国学力テストへの犬山市の不参加表明は全国的な教育論争を提起した。2006年に市長を辞職。その後、国政の転換期を衆議院議員として活躍する。2012年より中部大学客員教授として招聘される。
著作『君も市長になれ―犬山市長・石田芳弘の三〇〇〇日』（全国書籍出版、2003年）、『今こそローカリズム―石田芳弘対談集』（風媒社、2006年）など多数。

を使え使え、買え買え、つくれつくれ、これが日本の経済を高度成長させる駆動因でした。全く変わってきた。私の県会議員時代は本当にむちゃくちゃバブリーだったのです。海外旅行やゴルフ。私は節制しましたが、私の仲間の県会議員なんて、「三日間連続でゴルフやったけど、もう一日やるとプロになれるなぁ」とかね。県会議員をやりながらそういう話を平気でしていた時代でした。

それから、行政の裏金づくり、官官接待が当たり前だった。私は先ほど言いましたように秘書時代から江崎真澄先生の弟子でしたが、当時の自民党の総裁選挙は今の民主党の代表選挙と全然違う。この間やった代表選挙では札束は乱れ飛びませんでしたが、かつての自民党の総裁選挙では現実に封筒に札束の攻勢でした。あのころは全くそういう時代だったのです。政治権力を金で買った時代ですね。列島改造。とにかく開発志向、経済の高度成長、エネルギー多消費、こういうことが世の中を動かしていく駆動因だったのです。

それから、私が県会時代に非常に関心を持っていたのは愛知万博です。万博については後で述べますが、愛知万博の計画は完全に列島改造、開発志向で計画されていました。「全総」といいまして、要するにポストモダンのときの駆動因で愛知万博の計画を立てたのですが、実施するときになったらロストモダンで時代の価値観が変わってきてしまった。だから愛知万博は混迷しました。

九〇年代になって、橋本努さんは「ロストモダン」という言葉を使っていますが、バブルが崩壊しました。やはりこれは経済のグローバル化ですね。衆議院と参議院のねじれについて質問をよく受けますが、衆議院と参議院のねじれどころではないねじれは経済と政治のねじれです。グローバル経済はボーダレスですね。国境がありません。経済はどんどんボーダレスなのに、政治はボーダーフルなのです。領土問題なんていうのは典型でしょう。経済と政治の価値観が完全なねじれを起こしているから、国政はいつまでたっても解決できません。選挙を何遍やってもしばらくだめです。結論を言いますと、だからもう一遍原点に返って、中部大学が中心となってやっておられるＥＳＤのようなことを地方でやらなければいけないのです。地方がしっかりしなければいけないというのが私の持論です。

話を戻しますが、ずっと自分史を振り返ってみると、ちょうど高度経済成長期にニクソンショックというのがありました。経済がグローバルになり、ドルに国際通貨の権威がなくなってきたのです。当時は一ドル三六〇円だった。それがもう三六〇円を維持できなくなってしまったのですね。もう一つ、プラザ合意というのをしました。ドルがフロートする。そういうことでアメリカのドルの基軸通貨としての力がだんだん落ちていきました。

私は地方で政治と行政をやってきて、国会議員になってつくづく思ったのですが、やはり国政がやらなければいけないのは外交と防衛と通貨です。日本の製造業がいくらいいものをつくったって、働いたって、レートが違っていたらとても勝負になりません。いくらいいものをつくったって、高くしか輸出できなければ勝負にならないのです。今ＩＭＦと世界銀行の大会を東京でやっていますが、グローバル経済の中でこれはとても大事な国の問題です。あとの社会保障、医療、介護、子育て、教育、こういうものは地方に任せてくれればいい。そういうスキームをつくって、国政は外交、防衛、通貨のことだけ考えていればいいのです。エネルギーだって、別に

国策で原発をやらなくても、地方でやれと言われれば再生エネルギーでやれますよ。任せてくれれば皆さんやりますよ。

結局、一九九〇年代に入ってグローバル経済によって失われた一〇年、失われた二〇年、これがロストです。がたっと国力が落ちてきましたね。そして、おのずと内政のテーマも変わってきました。政権交代というのは、そういう流れの中から起こるべくして起こったと私は思うのですね。今抱えるテーマは、この政権交代で民主党が本来の皆さんの期待にこたえられなかったということです。

話はそれますが、僕の分析では勝ち過ぎたのです。皆さん、勝負は何でも勝ち過ぎると次があかんのですよ。過ぎたるは及ばざるがごとしと言って、勝ち過ぎた。僕はあの劇的な政権交代を衆議院の議場で見ましたが、ずらっと三分の二が民主党でしたからね。本当にあれは勝ち過ぎです。それと、今ごたごたしているのは与党民主党の責任ばかりではありません。野党の自民党もパニック状態になってしまったのです。だから冷静に野党としての機能を果たせなかった。とにかくパニック状態。あれだけ劇的な与野党の変化は初めての体験でしたからね。そういうことだと思います。

それで、ロストモダンの駆動因は、やはり僕は「持続可能」だと思います。「成長」とか「開発」とかいう考えから、「持続可能」というキーワードがロストモダンの社会を動かしていく駆動因になる。いっとき「もったいない」という言葉がはやったでしょう。ノーベル賞をもらったマータイさんですね。あれはいい言葉です。これがロストモダンの大事なキーワードではないかと思っています。

3. 天命を知る

次に三番目に移りまして、天命を知る。

『論語』について話したいと思います。なぜ僕が『論語』に関心を持ったか。日本の政治家が揮毫するのは『論語』の句です。私が江崎真澄先生の秘書をやっているときに、執務室に吉田茂が書いた「夫子の道は忠恕のみ」というのがかけてありました。吉田茂は中国の大使だったので、今テレビでやっていますが、非常に中国通だったのです。Sigeru Yoshidaの「S.Y.」で「素淮（そわい）」という号をつけて、「夫子の道は忠恕のみ　素淮」と書いてあった。夫子というのは孔子のことです。僕は毎日そこで仕事をしていて、いろいろ解説してくれる人もあったから、これはなるほどと思った。私の先生も色紙を書くのは『論語』の一節ばかりでした。今の政治家は色紙をほとんど書きません。あれはなぜかというと、印刷技術が発達したからです。印刷してしまうと、ありがたみがなくなってしまうのです。昔の人は一枚一枚書いていましたから、やはりもらうとありがたかった。私も市長になったときに書いてみましたが、しばらくしたら一〇〇円ショップで私の色紙が売られていたから、もうこれは書かないほうがいいと思ってやめました。このごろははやりません。

『論語』の話に戻りますと、やはり孔子の言ったことには、日本人だけではなくて東洋人の文明の一つの思想みたいなものがありますね。特に東アジア地区。そこで『論語』にひかれていきました。ここにお若い人もいらっしゃいますが、古典というのは新しいから続くのですよ。本物の古典は新しいのです。「古典」と古いという字を書きますけれども、古いものではありません。新しいから古典は読み継がれるのですね。僕も『論語』には政治家として深く教えられるところがありまし

た。

孔子が一番言っていることは、学ぶことは喜びだということです。学ぶとはどういうことかというと、私流の解釈では生きるということです。生きるということと学ぶということはイコールです。「吾れ十有五にして学に志す」から孔子の人生は始まるのです。十五歳のときから学に志すというのは、生きることを始めたということでしょうね。孔子は、振り返ってみて、「三十にして立つ」と。三〇歳で自立です。二〇歳代の大学生のころはわからないから、ふらふらしてもしようがないのです。三〇歳を過ぎてふらふらしておる人はちょっといけませんね。「四十にして惑わず」、四〇歳を過ぎて初めて惑わずということは、迷いがとれるということでしょうね。

そして、私が犬山の市長になったときは「五十にして天命を知る」でした。天命というのは、これも解釈ですが、井上靖さんが最後に『孔子』という歴史小説を書いたそのテーマが天命なのですね。「お前はこういうことをやれという天の声が聞こえてきた」と、井上靖さんが書いていましたが、僕は五〇代で「この仕事をやるためにおれは生まれて来たんだな」と思った。ヘミングウェイの『老人と海』の中にも「お前はこれをやるために生まれてきたのだ」という一節がある。僕はこれが天命だと思いまして、自分では市長職を楽しみました。このときがロストモダンだったのです。

私はちょうど一九九五年に犬山市長になりました。四九歳ちょっと前でした。その一九九五年というのは阪神・淡路大震災やオウム真理教のサリン事件があった年です。私の市長としての仕事でそのときこれだと思ったのは、この年に地方分権法が決議されたのですが、これからは地方分権で行こうということでした。

地方分権という思想の背景をちょっと解説したいと思います。日本は第二次世界大戦が終わったときに国を変えました。それこそ国体を変え、憲法をつくり、教育基本法をつくり、農地解放をやり、大きく変えましたが、全然変わらないところもあった。中央対地方の役所の中の構図は変わりませんでした。戦争末期の一九四三〜四年に国家総動員令というものをつくり、中央の官僚は戦争に勝つために世界に冠たる完璧な中央集権の官僚制度をつくっていましたが、そのシステムだけは戦後に残ってきたのです。だから、国家総動員令を使って日本は経済復興をした。自動車を国産にしよう、新幹線をつくろう、東京オリンピックをやろう。大阪万博までが国家総動員令です。戦争をやるエネルギーを経済復興に向かわせたら、ものすごいエネルギーが出たのです。人口は増え、経済は右肩上がり。そうやって上ってきたこの状況がロストモダ

ンになってぱたっと変わりまして、そこで地方分権が出てきたわけです。少子高齢化が直撃しました。中央集権ではだめだ、とてもできないと。それからもう一つ、グローバル経済で経済がボーダレスになっていくという時代背景の中で、中央集権ではとてももたない。そこから地方分権という考え方が出てきました。何でもかんでも中央で決めるのではなくて地方でやってくれと、これがそもそもの地方分権の思想です。

民主党の内閣になってからは「地域主権」という言葉を使いました。なかなか人口に膾炙しなかったのですが、本当は民主党の地域主権のほうがさらに進んでいるのですよ。地方分権というのは官対官の権限移譲です。中央政府のやっている仕事を地方政府でやってくれというものです。ところが、地域主権というのはコミュニティです。鳩山さんが「新しい公共」ということを言ったでしょう。僕は鳩山さん好きでしたよ。理念の政治家でね。理念と行動にちょっとねじれが生じましたけれども、僕は理念は好きだった。就任後すぐ国連へ行って、日本は二〇二五年までにCO$_2$を二五%削減すると歴史に残る演説をしました。僕の携帯にはまだホットラインがあります。あの方、今は暇ですから、電話をかければちゃんと会ってくれます。

話がそれましたけれども、ロストモダンと私が市長になったときとぴたっと合ってきた。僕はこのころから自民党の考え方にちょっとこれは時代おくれだなということを感じつつありましたから、市長になったときから政治的なスタンスを徐々に徐々に民主党にシフトしていきました。自民党の派閥、世襲制、金権政治、開発志向、経済成長一点張りでは日本はだめだということで、だんだん民主党にシフトしていって、民主党の国会議員になったわけです。これが私の政治の経歴です。

地方分権の中で私が犬山市をどういう町にしようと思ったかということを述べます。ここでのキーワードは、やはり「合併論」。合併論はまちづくり論です。それから、「マニフェスト」。僕はこれにはまり込んだからね。マニフェストというのは、行政改革と選挙とを結びつけるものです。選挙をやってマニフェストに書いたものを行政に具体的に落とし込めますから、理論的ですよ。

民主党がマニフェスト違反だという議論は大いにやってください。これがまたマニフェストを再生しますから。マニフェストに返らなければいけないと思います。書き方はいろいろありますが、マニフェストというのは選挙と行政を結びつけるきずなですから、やはりこれは理論的な選挙になります。僕はマニフェスト実践者です。前の三重県知事の北川正恭さんが唱えて、あの人が知事会のマニフェストの代表になり、僕が全国の市長のマニフェストの代表になって、「ローカル・マニフェスト推進首長連盟」というのをつくってマニフェスト運動をやりました。マニフェストはこれからの選挙でも大事です。

野田さんの消費税はマニフェストに書いていないと言われますが、マニフェスト論では書いていないことをやってもいいのです。それから、書いてあることをやらなくてもいいのです。いいけれども、そのときには、なぜそういう状態が起きたか、政権をとってちょっと違ってきたのだということをきちっと説明しなければいけません。説明して、次の選挙でそれが是か非かを問うわけです。だから、書いていなかったことをやったというのは、厳密に言うとマニフェスト違反ではありません。政権になかった野党のときには財源のことはわからなかったわけですから。実

際に与党になってみて、ああそうかとわかったら、それは正直に話せばいいのです。正直言って、説明が決定的に足りませんけれどもね。あまり忙し過ぎてばたばたしてるものだから、大事なことがおろそかになるのです。

その話はこっちへ置いておいてもう一度話を戻しますと、市長のときに合併論がありました。地方分権の文脈からは、初め合併論はなかったのです。なかったのだけれども、突如出てきました。当時、自治体は三三〇〇と言っていました。今は一六〇〇ぐらいですから半分になりましたけれども、読売新聞をこの間見ていましたら、合併してよかったと思っているのは三割、失敗したと思っているのは七割ということでした。合併論は検証しなければいけないのですが、何もやっていません。やりっぱなし。戻ることはできませんが、検証することによってさらにいい自治体をつくっていくことはできます。

僕は頭から合併論には反対だったから、犬山と江南と岩倉と丹羽郡の大口と扶桑で合併をという案が上意下達で来ましたが、僕がその合併協議会で最初に「しない」と発言してその合併論は崩れました。よかったなと思っております。むしろ僕は当時、犬山に明治村というのがありますから、明治村を独立させてくれないかと総務省へ言いに行ったぐらいです。聞いていた総務省の人は「ええっ！」と言って二の句が継げませんでしたけれどもね。

合併というのは遠心力で町をつくろうとするものです。遠心分離機にかけてしまうのです。やはり町は求心力です。中心軸をつくって、精神的なもので軸をきちっと立てなければいけない。僕は建築家の黒川紀章さんに随分親しくしていただいたのですが、黒川さんは「ヨーロッパの町を見なさい」と言われました。小島先生が大家ですから詳しくお話しいただけるのでしょうが、僕もハンガリーなどへは行きましたけれども、ヨーロッパの町には必ず中心に教会があるのです。これが大事です。教会に精神的な求心力がある。そして、教会の周りに広場がありまして、その周りにずっと家をつくっていくのです。日本のように大型ワンストップショッピングセンターをつくったらばらばらになります。あれは遠心力です。それから、高速道路のインターチェンジね。ああいうものをつくると遠心力でばらばらになってしまうのです。

犬山にはお城がありますが、日本の町にはみんなお城があったのですよ。日本ではお城を中心に町をつくってきたのです。徳川幕府が一国一城令を出し、明治政府が廃城令を出してほとんど壊滅しました。お城の天守は「天主」とも書きまして、東洋的な思想観である北斗七星を背後に南のほうへ町をつくっていく。日本の城下町はみんなそういうふうにコスモロジーでつくっているのです。そういうことを全部忘れてしまって、戦後の行政では市役所をつくるのも公共の建物をつくるのもみんなゼネコンに丸投げしました。何も精神性がない。町は壊滅ですよ。だから、僕はもう一度求心力のある町をつくろうと思って城下町再生に取り組みました。

それから、一番言いたいのは教育です。教育行政に力を入れてやってきました。さっき申し上げましたが、私は教育者になりたいと思っていたからね。「人間は教育によってつくられる」。だから、教育行政に力を入れました。教育長に瀬見井さんという人を呼んできました。県会当時の畏友、親友です。役所の職員というのは、議員を見るとほとんど「先生、先生」とへこへこするのですが、この人物は「おい！」と議員の肩をたたいたりして、絶対に「先生」と言わない男でした。一種の

奇人です。彼のお父さんは教育者で、教育者の血が流れていましたから、教育長をやってくれと頼みました。

教育委員会については、大津市なんかで今もめていますね。皆さん、教育委員会制度をもう一遍勉強してください。戦後アメリカからいろいろなものを取り入れて改革をやりましたが、あれは行政委員会というのです。教育委員会ばかりではなくて農業委員会とか監査委員会とか七つぐらいありますが、市民が直接委員になって行政の政策決定に関与できるという直接民主主義を担保した非常にすぐれた制度です。それがGHQからぽんと来たものだから、行政委員会の真の意味が理解できていない。教育委員会も形骸化されてしまいましたが、教育委員というのは市民の代表です。議会はもちろん間接民主主義ですね。ところが、行政委員会は直接民主主義を体現したものなのです。

教育委員会の教育長というのは、言わば教育委員会の事務局長です。大学でもどこでも、組織では事務局長という人が目玉です。こういうところに改革志向の人を持ってくると変わるのです。「事務局長」と言うのですが、事務屋ではだめです。組織は変わりません。だから、僕は教育長に思い切りやってくれと言いました。彼は行政マンですから、法律も知っています。やはり法律も知らなければいけません。法律というのはうまくできておる。どこを突いたらいいかということは、行政の法律を読んでいる人がよく知っています。教育委員会だとか現在の教育行政のあり方だとか、いろいろなところに盲点がありますから、そこを突いて教育改革をやりました。

私が大体の理念を述べると、教育長が私の考え方を受けて行政的に劇的な改革をしていきました。手法としては少人数学級です。少人数授業などで教育に予算、資源を投入する。「昔は五〇人や六〇人で授業をやっておったんだ。何で我慢できんのだ」という人がいますが、昔は携帯電話もありませんし、家へ帰ってもテレビばかり見ていられる家庭ではありませんでしたよね。だから、やっぱり今は少人数にしなければ能率が上がりません。また、教育委員会というのは教師たちを支える装置です。教育委員会が教師たちを元気づけなければいけない。ところが、全国のほとんどの教育委員会は教師の箸の上げ下ろしまでやるから、教師たちが萎縮してしまうのです。

私は教育者ではありませんが、教育にかんしては、愛知県の議会議員のときは文教委員を七回やりましたし、犬山市長のときには文科省の中央教育審議会の委員をやりましたし、衆議院のときには文科委員をやりましたから、政治家として一応教育のことを語れると思って申し上げますと、今あるいろいろな欠陥のうちの一つはやはり大学入試です。大学入試のために高校教育があり、中学があるのです。受験勉強の得意な子と得意でない子

に頭のよしあしは関係ないですよ。だから、東京大学に入る人はみんな頭がいいという尺度は間違いです。大学入試で一つの基準をつくってしまうからね。

なぜ犬山は全国統一テストをやらなかったのかとよく聞かれますが、あれは僕が教育長と相談して決定しました。よく尋ねられるし、「あんたも変わっとるな」と言われますけれども、人生はウサギと亀の競争なのです。大学入試のところで勝つのはウサギです。亀をつくればいいのです。亀をつくるのは生涯学習です。いつでも、どこでも、だれでも、生涯学ぶ喜びを知ることができる教室がまちなのです。「まちは生涯学習の最良の教室である」、これは僕がつくった言葉です。それから、「全市博物館構想」。このおもしろさも話したい。博物館というのはおもしろいでしょう。僕は世界中のどこのまちへ行ったって、まず博物館を見に行きます。本当にわくわくするようなおもしろさがあります。引きつけられるものがある。それがどのまちにもあるのです。そういう人生を楽しむ内発力こそが真の学力を身につけていくと思うのです。他人と比較する学力は一時的なものですよ。教育論についてはまだまだ述べたいことはたくさんありますが、今日はこれくらいにします。

それから、言葉だけ言っておきますと、「議会改革」。今日は優秀な地方議員の人がみえますけれども、とにかく地方議員がいけません。議員を「良選」と言いますが、まさしく地方議員、地方議会のレベルが高くなってリーダーシップを握らないと、日本の民主主義は底上げできないなという感じです。地方議会改革は非常に大事です。

4. 政治という冒険に魅せられて

さて、結論にします。四番目の政治という冒険に魅せられて。

『論語』では「五十にして天命を知る」でしたが、「六十にして耳順う」とも言っております。「耳順」、六〇歳にして初めて人の言うことが聞けるようになる。そして、「七十にして心の欲する所に従いて矩を踰えず」、これは自由気ままにやっても世間の規範に外れないような人生になるということです。孔子はこのように言っていますが、僕はちょうど市長三期目で六〇歳を迎えました。

これは『論語』の言葉ではないのですが、六〇歳のことを「還暦」といいますね。還暦になると赤いちゃんちゃんこを着るでしょう。赤子に戻るのです。もう一遍スタートへ戻る。二巡目の人生が還暦です。そう思ったから、六〇歳になったとき、ギアを切りかえて自分の人生に再挑戦したいなという気持ちがありました。また、どんな自治体でも、市長というのは三期以上、一〇年たってくるとつき合う人が固定するのです。やっぱりソリが合わない人とはつき合いたくない。市民のネットワークが固定してくるし、市役所の中でも固定してくる。これはだめだと思ったということもありまして、三期やったらやめないといけないなという気持ちがあった。それが還暦と重なり、そこへ愛知万博と知事選挙があった。

僕が県会議員だった当時、愛知県で万博が開催されるように一生懸命やりました。この愛知万博についての歴史を思い起こしてください。仲谷さんという知事が愛知でオリンピックをやろうとして失敗し、その責任をとるみたいな形で知事をやめて、次に鈴木礼治さんという方が知事になりました。鈴木礼治さんはポストモダンの申し子みたいな人で、経済成長、開発志向の方です。人柄のいい人

で僕も大好きだったのですが、政治の価値観はポストモダンでした。四全総からは愛知県が産業技術の首都と位置づけられました。工業出荷額連続日本一というのが愛知県のアイデンティティで、最初はそういう延長線上に第二の大阪万博というイメージで愛知万博の計画が立てられました。一九七〇年の大阪万博はすごい万博でした。六五〇〇万人でしたか、空前の万博です。中央集権で経済発展を進めていたのが当時の通産省。通産省の万博準備室の室長が堺屋太一という人でした。愛知万博のときもこの人が出てきてポストモダンの哲学でやろうとしたからごちゃごちゃになってしまったのですが、ちょっとそれは置いておきます。

私が県会議員のとき、鈴木礼治さんは、自分のやりたいことは三点セットだと言っていました。まず高速道路、第二東名というやつです。この間一部開通しましたね。中部新国際空港の建設、そしてリニアモーターカー、それらにプラス一で愛知万博をやって、三点セットプラス一と言っていたのです。そういうことで、鈴木県政では高度成長、開発、エネルギー多消費というイメージで計画をされた。しかし私は犬山市長になったころからもうそういう世の中ではないのではないかということをだんだん感じ始め、ロストモダンの持続可能な社会を目指すべきではないかと思って政治スタンスをチェンジしてきたわけです。果たせるかな、私が市長になってから愛知万博は混迷に陥りました。

愛知万博は二〇〇五年に開催されました。「海上の森」という固有名詞を皆さんも覚えておられるでしょう。海上の森というのは県有林だったから、愛知県は取得が安上がりだということであそこを万博の会場に決めたのです。私は愛知県の砂防協会の会長を一〇年以上やりましたが、あそこは典型的な砂防の森です。初めの計画では、それを全部伐採して大阪万博並みのことをやろうとしていました。それが初めのイメージだったのです。しかし、万博の歴史で初めて、そこに市民運動が盛り上がってきました。決定打は、海上の森に鷹の巣が見つかったことです。

鷹は自然の生態系ヒエラルキーのトップにあるのですね。「鵜の目鷹の目」といって、水の中では鵜が、空からだと鷹が一番見える。僕は犬山市長のときに、犬山では鵜飼いをやっているから、鷹狩りもやってやろうと思った。鷹狩りに関心を持って、鷹匠を呼んできて実際に鷹狩りを見たこともあります。鷹の定番としては鴨を捕らえるのですね。野鳥を捕らえるのです。その野鳥がまた水の中の魚を食べるということで、ずっと底辺へつながっている。鷹がいるということは、その土地の生態系が完璧にできているという何よりの証拠なのです。

その鷹が海上の森で見つかった。自然派の市民運動の皆さんがＢＩＥという万博を決定する世界の組織に手紙を書いたりして、こんなことをやろうとしてると文句を言ったのです。それでＢＩＥの調査団が来た。私は県会議員のころで、新聞で読んだことを覚えています。ＢＩＥのトップが愛知県や通産省の官僚に「あなたたちは地雷の上を歩いている」と言っていました。愛知県は、もし海上の森で開発をしたら、新住宅計画といって跡地に高蔵寺ニュータウンのようなものをつくろうとしてたのですが、それはいけないという運動がいろいろ盛り上がってきて、プロセスを省いて簡単に言うと、愛知万博は迷走しました。それが時代の変化だったのです。大阪万博と決定的に違うところです。

大阪万博は六五〇〇万人でした。愛知万博は二五〇〇万人の予想を立てた。しかし、三

〇〇〇万人来ました。僕も市長をやっていたからわかりますけれども、愛知県が愛知・岐阜・三重県の自治体に券を割り当てたのです。そこそこ赤字を出さないように全部割り当てた。それから、ＪＡ（農協）、商工会、商工会議所など、いわゆる体制派のあらゆる団体に頭割りで割り当てた。粉飾決算です。数だけ。員数主義というやつだね。話はそれますが、国会議員は員数主義ですよ。人間は関係ないの。何人ここで賛成したらいいかとか、こっちのグループに何人おるとか、員数主義が強過ぎる。ここの中には僕が大変お世話になった人もたくさんいらっしゃいますのでまことに申しわけありませんが、僕の心の中では、やっぱりもう一度自治体行政をやりたい、まちづくりをやりたい、ローカリズムに戻りたいという気持ちがありました。

万博の話に戻ります。結局、迷走した万博を仕切ったのはトヨタでした。皆さん、「愛知万博＝トヨタ博」という言葉があったでしょう。豊田章一郎さんが出てきた。トヨタ自動車もグローバル企業になって、やっぱり万博ぐらいの世界的な大イベントを仕切るということをやってみたかったのではないかと思います。「愛知万博＝トヨタ博＝環境博」になって、トヨタ自動車はあれからハイブリッド車で全世界に有名になりましたね。そんなイメージで愛知万博をやりましたが、私が今回ここへ呼んでいただいて最大にうれしいと思っているのは、中部大学が事務局となって環境万博の遺伝子を受け継いでおられることです。ＥＳＤですね。日本を動かしていく駆動因が変わってきた。変わってきた中で一番大事な思想がこのＥＳＤに入っていると私は思っています。何とかＥＳＤのプログラムに貢献できるような仕事がしてみたいというのが私の今の夢です。

知事選挙のことに触れますと、愛知県のあり方として、神田さんもなかなか手がたくはあったのですが、頭の中は完璧に開発時代を引っ張っている人でした。根は経済成長、開発志向というタイプの政治家だった。だから僕は、万博をやったのだから、あとは環境だとか教育だとか、医療だとか、介護だとかいうことに変えなければいけないのではないかと思った。いつまでも工業出荷額日本一とばかり言っておってはいけないということで、市長を三期やって還暦になったということもあって愛知県政に挑戦したわけです。ちょっとの差でした。一三五万票いただいたのですよ。本当にありがたいことでした。万博のときに、いわゆる過去の思想で万博をやろうとする方向と市民運動を中心にして万博を変えようとする方向のせめぎ合いがあったのですが、大阪万博のようにしてはだめだという人たちが僕を応援してくれました。大いに応援してくれた。また、教育に関心のある人、医療・介護・子育て・環境とか、がらっと政治の視点を変えなければいけないと考える人たちが知事選挙で僕を応援してくれたと思います。ですが、落選は落選ですので、衆議院議員になりました。

また、名古屋の市長選挙については、僕も昔は河村さんと近かったのですが、減税一本やりではちょっとね。名古屋の市会をへったへりくそに言って、代わって出てきた減税の市会議員はもっと悪いですから。僕はあのときマスコミに、市会議員の給料を下げるだけではだめだ、制度を変えなければいけないと主張しました。

僕の夢の一つで、どうしてもやりたいことがあるのです。日本の地方議員はかわいそうです。予算の提案権がないし、行政の執行権がない。これは地方自治法でそうなってる。僕はヨーロッパの地方自治体を見てきました

が、ヨーロッパへ行きますと、例えば春日井でいう部長クラスはみんな議員がやっています。行政の執行をするのは議員です。それから、予算の提案も議員がするのです。イメージとしては、議員というのは皆さんの代表ですから、その町のマネジメントやガバナンスをやらないといけないのです。取締役代表、重役会議なのです。ところが、今の地方議会を見てください。あれでは総会屋ですよ。手をあげて言うだけ。口入師みたいなものです。全く予算の提案権がない。それから、行政の執行権がないからかわいそう。

僕は名古屋の市長選挙のときに一つの対案を出しました。選挙というのは比較ですからね。河村さんに対比として出したかったのは、名古屋で議員内閣制をやろうよということでした。マスコミは全然取り上げませんでした。「税金で食うやつ極楽、税金払うほうは地獄」、これ一本。本当にマスコミもいいかげんにしてもらわないといけません。大体マスコミの記者は僕が議員内閣制について何遍説明しても関心がなかったし、議員の役割が理解できなかった。僕は地方議会や地方議員は民主主義の大切な制度だと思います。それが名古屋市長選挙の意味でした。

下呂の市長選挙は、下呂で議員内閣制をやろうとしたのですが、しかし下呂にはそのことより私がずっと前から感じていました持続可能な山間の地の生き方がありました。「もったいない」とかね。浪費しない。もう一遍日本があるべき姿に戻る非常にいい文化があると思い、私は橋下徹さんに対抗して「山中八策」というマニフェストをつくりました。橋下さんが言っていることは、一定の理解はできます。あの人は道州制とかローカルパーティをつくっていくと言っているでしょう。僕も地方分権の中でのあの文脈は理解できます。ただ、教育の考え方は全く反対です。いろいろ議論はありますが、皆さんもいろいろ考えてください。皆さんが民主主義の主人公だから。

最後に、僕の経験から言うと、政治とは未知なるものへの栄光ある挫折多き冒険であります。

僕の高校時代に、国語の先生がカール・ブッセという詩人の詩を読んでくれました。「山のあなたの空遠く／「幸(さいはひ)」住むと人のいふ。／噫(ああ)、われひとと尋(と)めゆきて、／涙さしぐみ、かへりきぬ。」。あこがれのかなたに理想の夢がある。この「ひと」というのは恋人であって、愛人と二人で理想を求めていったけれども、最後は挫折して帰ってきた。続いてこの詩「山のあなたになほ遠く／「幸」住むと人のいふ。」で終わっていて、挫折して帰ってきてもまだ向こうに夢があるよという詩です。先生はこの詩を、「噫、われひとと尋めゆきて」というのは恋愛して女性と結婚することであり、「涙さしぐみ、かへりきぬ」というのは別れることであって、「なお遠く」というのはまた次の彼女がいるぞということだと、こういう解説をしてくれた。高校生の僕にはそれがすごく印象的で、この詩がずっと焼きついております。政治も一緒なのです。未知なるものへの栄光ある、されど、されど挫折多き冒険であります。